

香道千代農秋下卷二

大枝流芳編集

新行書藏書

○鴛鴦香

流芳組

香四種也

昆陽 四包

益田 四包

右の内一包ずつ試みに出す。
「鏡池」一包ウナリ。試みなし。

香道千代農秋下卷二

大枝流芳編集

新組香十品

○鴛鴦香(えんおうこう) 流芳組

香四種也

「昆陽(こや)」四包 「眞野」四包 「益田」四包

右の内一包ずつ試みに出す。

「鏡池」一包ウナリ。試みなし。

右試三包焼終て雙定とて連中
 二人の組合め方へりては
 組合の法は
 葛蒲(あやめ) 杜若(かきつばた) 玉藻(たまも) 村芦(むらあし) 真菰(まこも) 左右
 裏は無地、或は一樣に水波など絵に
 かくべし。さて、うつむけにふせて連中
 にとらせて、同じ紋に取り当たりし人を
 組み合はす。鳥の雌雄(めお)は、左を「雄」とし、
 右を「雌」と定む。さて、此の札を盤に
 各自のしるしに鳥の傍らにおくべし。
 記録にも、此の双定(つがいさだめ)終りて後、名を書き
 付くべし。さて、出香十包打ちませ焼き出す
 べし。一炷(ひとつか)ひらき、記録(きらく)当たりばかりを
 書き付け、「ウ」は二点、独聞(ひとりきこ)は三点、盤(ばん)の目
 すすむ事も点(てん)に同じ。常(つね)の香(か)は

右試三包焼終りて、「雙定(つがいさだめ)」と云うて、連中
 二人ずつ組み合わせ、五方(ごほう)へわかれ聞くべし。
 組み合せの法は
 「葛蒲(あやめ)」左右 「杜若(かきつばた)」左右 「玉藻(たまも)」
 左右 「村芦(むらあし)」左右 「真菰(まこも)」左右
 かくのごとく札十枚(じゅうまい)こしらえ、
 裏は無地、或は一樣に水波(みづなみ)など絵に
 かくべし。さて、うつむけにふせて連中
 にとらせて、同じ紋(もん)に取り当たりし人を
 組み合はす。鳥の雌雄(めお)は、左を「雄」とし、
 右を「雌」と定む。さて、此の札(せ)を盤(ばん)に
 各自のしるしに鳥の傍ら(わら)におくべし。
 記録にも、此の双定(つがいさだめ)終りて後、名(な)を書き
 付くべし。さて、出香(しゅきやう)十包(じゅうぱく)打ちませ焼(や)き出す
 べし。一炷(ひとつか)ひらき、記録(きらく)当たり(あたり)ばかりを
 書き付け、「ウ」は二点(にてん)、独聞(ひとりきこ)は三点(さんてん)、盤(ばん)の目
 すすむ事も点(てん)に同じ。常(つね)の香(か)は

間當次第一点すすむも一間たるべし
 立物の「鴛鴦」五双なり。一双方つ五
 方へわけおくなり。双となりては雄に
 ても雌にても一間おくるれば、かま
 いなし。二間おくるれば、香聞かざる人
 の鳥もおくれし方、一間ついて(付いて)進む
 べし。これによつて組合の相手よ
 ければ、盤にては、つれ(連れ)てすすむなり。また、

ウを聞きて二間行くべき時も、つれの鳥
 二間おくるれば、「ウ」ききし人、一間も
 どり、つれの鳥一間進むべし。と
 かく、間(あいだ)二間(ふたま)ちがえはもどるなり。独聞
 の「ウ」にて三間すすむ時、つれの鳥、間
 二間おくるれば、三間行く鳥、一間も
 どし、あとに有る鳥、二間すすめ、いれ
 合するなり。組相手あしければ、と

聞き当て次第一点すすむも一間たるべし。
 立物の「鴛鴦」五双なり。一双方つ五
 方へわけおくなり。双となりては雄に
 ても雌にても一間おくるれば、かま
 いなし。二間おくるれば、香聞かざる人
 の鳥もおくれし方、一間ついて(付いて)進む
 べし。これによつて組合の相手よ
 ければ、盤にては、つれ(連れ)てすすむなり。また、

「ウ」を聞きて二間行くべき時も、つれの鳥
 二間おくるれば、「ウ」ききし人、一間も
 どり、つれの鳥一間進むべし。と
 かく、間(あいだ)二間(ふたま)ちがえはもどるなり。独聞
 の「ウ」にて三間すすむ時、つれの鳥、間
 二間おくるれば、三間行く鳥、一間も
 どし、あとに有る鳥、二間すすめ、いれ
 合するなり。組相手あしければ、と

かく一間の損なりと心得べし。盤の
 真中に「玉藻の床」とて、圓(まろ)く残し、
 藻の作り物と「あやめ」の作り花とを
 さし置くべし。是へはやく行き着きし
 鳥、「勝」なり。しかし、つれの鳥おくるれば、
 行き着きし鳥の聞きにてすすめ行くべし。
 一しながら行きつかざれば、「勝」とせず。
 香あれども、五方の内いずれにても
 鳥一雙とも行き着かば、「盤の勝負」は終りなり。
 香は残らずきくべし。記録の法は常の
 ごとし、少々書く法あり。左の図にて考え
 みるべし。
 札の紋(おし鳥の歌名所を用ゆ)
 表「昆陽」三枚 「眞野」三枚 「益田」三枚
 「鏡池(かがみのいけ)」一枚 以上十枚一人分なり。
 裏 双定の通り、同じ物二組ずつ、左右

の字とて、五色にて十人分
 とあるあり、考ふて考べし

立物の事

鴛鴦五双 雄五羽 雌五羽 以上十羽なり

盤の事

五角になりとも、または、園(まる)くなりとも
又、洲(すず)なりとも、または、中(なか)なりとも
又、残(のこ)りとも、または、玉藻(たまも)なりとも
又、菖蒲(かむよ)なりとも

鴛鴦香之記

香組 昆湯 山吹

益野 益田 益後池 益三香

名安 菖蒲九 昆 益 真 真 昆 益 澹 益 昆 真

菖蒲右 益 真 益 澹 昆 五

村左 益 真 真 昆 益 澹 益 昆 真 十

村右 益 昆 益 三

月日

の字をそえて五色にて十人分
 となるなり。前にて考うべし。

立物の事

「鴛鴦」五双 「雄」五羽 「雌」五羽 以上十羽なり。

盤の事

五角になりとも、または、園(まる)くなりとも、
 または、洲(すず)になりとも作り、また中に
 圓く残し、「玉藻」、「菖蒲」を置くべし。

「鴛鴦香之記」

○八橋香

双巒組

香五種也

か衣三包 きつなれにし 三包
つましあれば 三包 はるばるきぬる 三包
右の内一包ずつ試みに出す。
「旅をしぞ思う」一包ウなり。試みなし。

右試み四包終りて、残る八包打ちませ、一包取り
除きて、「ウ」の香一包を入れ、また八包となし
打ちませ、焚き出だし、聞きに随いて札打つべし。「ウ」
二点、独聞三点、常の香きき当たるもの

一点、八包聞き終りて札をひらき記録す。
記録は、歌の頭字(かしらじ)一字ずつ書くべし。
札にも同じ、「か」二枚、「き」二枚、「つ」二枚、「は」
二枚、「た」二(一)枚、以上九枚。裏の紋は「八橋」の
読み合せを書くべし。

花 五月雨 玉柳 構衣(きぬた)

郭公(ほととぎす) 雪 杜若(かきつばた) 沼 橋

旅

○八橋香(やつはしこう) 双巒組

香五種也

「から衣」三包 「きつなれにし」三包
「つましあれば」三包 「はるばるきぬる」三包
右の内一包ずつ試みに出す。
「旅をしぞ思う」一包ウなり。試みなし。

右試み四包終りて、残る八包打ちませ、一包取り
除きて、「ウ」の香一包を入れ、また八包となし
打ちませ、焚き出だし、聞きに随いて札打つべし。「ウ」
二点、独聞三点、常の香きき当たるもの

一点、八包聞き終りて札をひらき記録す。
記録は、歌の頭字(かしらじ)一字ずつ書くべし。
札にも同じ、「か」二枚、「き」二枚、「つ」二枚、「は」
二枚、「た」二(一)枚、以上九枚。裏の紋は「八橋」の
読み合せを書くべし。

「花」「五月雨」「玉柳」「構衣(きぬた)」
「郭公(ほととぎす)」「雪」「杜若(かきつばた)」
「沼」「橋」
「旅」

香三種也

香三種也 一 二包 二 三包 三 三包

右各々試みなし

右九包打ちませ内六包除去残り三包
一 炷づつ焚き出す。連中、名乗紙に聞き
と書き付け出すべし。聞き書き付けようは

二包とも同香と聞かば「籬梅(まがきのうめ)」と書き付くべし。

三包とも別香と聞かば「花橘(はなたちばな)」と書き付くべし。

三包の内、一包別香と聞かば「真蘭(まじらばかま)」と書き付くべし。

右の通り、同香の次第はかまいなし。ただ

一包別の香あるかなきかをよくきき

わくべし。

句集香之記

香種 一 けりれ歌

二 玄川

三 びり見み

籬の梅

名乗 ゆらりるる

香道入門

名乗 花くらふれ
 名乗 少かけぬ
 名乗 難波梅
 月日

右点のかけようは一人間二点二人より一点
 ○難波名物香 流芳組
 先難波名所香を疑多し歌道
 と難波の道ともいへばもし「歌名所香」

といふ事や今爰に難波の名
 物と集て組ゆる
 螢二包 芦二包 衡二包
 右試三包過ぎて出香五包焼き出す
 夏は「螢」の香一包まし(増) 秋は「芦」の香
 一包まし、冬は「衡」の香一包まし、春

右、点のかけようは、一人間二点、二人より一点。

○難波名物香(なにわめいぶつこう) 流芳組

先に「難波名所香」あり、疑い多し。歌道を難波の道ともいへば、もし「歌名所香」

といえる事にや。今ここに難波の名物を集めて組み侍る。

香四種也

「螢」二包 「芦」二包 「衡(ちどり)」二包

右の内一包ずつ試みに出す。

「梅」一包 試みなし。客なり。

右試み三包過ぎて、出香五包焼き出す。但し、夏は「螢」の香一包まし(増)、秋は「芦」の香一包まし、冬は「衡」の香一包まし、春

ハ梅の香一包ゆべし香興行の時
 乃季に随く一包ゆべし加て
 包と打ませ焚く梅八枚
 香興する所なれば初客と聞きし
 人の四点たるべし外は当たり一点ずつ中
 終りに出でし「客」聞きし人は三点たるべし
 折居に入れ置くべし

一人分なり
 裏「堀江」「玉江」「住吉」「三津」

管ニ枚 芦ニ枚 衛ニ枚 梅ニ枚 以上八枚

札の紋

は「梅」の香一包ますべし。香興行の時
 の季に随いて一包を増し加えて、以上五

包となし、打ちませ焚くべし。(兼ねて包紙は試みとも十一包こし
 らえ置くべし。札も一人前、八枚ずつこしらえおきて、いらぬ札は
 除き用ゆべし。)
 「梅」は難波に
 専ら賞する所なれば、初客を聞きし

人は四点たるべし。外は当たり一点ずつ中
 に出でし、「客」は二点、独聞ならば三点。また
 終りに出でし「客」聞きし人は三点たるべし。

(終りに「ウ」出するを「すて客」とてきらう人あり。疑わしきことな
 り。ウいまだ出でざるを知りて、札をのこしおき、終りの間に合わす
 るは手柄なり。そしるべからず。) 出香五包とも焼き終り、包紙、札
 を開き、記録すべし。札は、はじめは
 折居に入れ置くべし。

札の紋

- 「管」ニ枚 「芦」ニ枚 「衛」ニ枚 「梅」ニ枚 以上八枚
- 一人分なり。
- 裏「堀江」「玉江」「住吉」「三津」

大江 浪速 高津 芦屋
 長柄 昆陽

難波名物香記

香組 菅 久々
 梅 百穂
 せきろう
 もえ

名文
 江 梅 芦 菅 梅 菅 菅
 三息

三津 菅 梅 菅 菅
 大江 菅 菅 梅 菅
 三息 四息

月日

○新花月香

香五種也

流芳組
 花 二包 月 二包
 嵐 二包 雲 二包
 右の内一包ずつ試みに出す。
 「晴(はれ)」一包ウなり。試みなし。

「大江」「浪速」「高津」「芦屋」
 「長柄」「昆陽」

〔難波名物香〕

○新花月香(しんかげつこう) 流芳組

香五種也

「花」二包 「月」二包
 「嵐」二包 「雲」二包
 右の内一包ずつ試みに出す。
 「晴(はれ)」一包ウなり。試みなし。

右試み四包終りて、出香五包打ちまぜて
 焼き出す。当たりに点をかくる。「晴」は二点、独
 間三点。もし「花」と「嵐」と聞きまがえ、「月」
 と「雲」とききまがえ、「晴」と「嵐」と聞きま
 がえ、「晴」と「雲」と聞きまがえしものは、
 「過急の星」一つ付くべし。「月」と「花」と「晴」と
 の聞きまがえば過急なし。出香各々きき
 終わり、札、折居より出だし、記録すべし。

札の表

「花」「月」「嵐」「雲」「晴」以上五枚一人分なり。
 五十枚にて十人分なり。

札の裏

「吉野」「初瀬」「志賀」「奈良」「生駒」
 「更科」「姨捨(おばすて)」「三笠」「廣澤」「須磨」
 かように花月の名所の名を書くべし。

花月嵐雲晴
 札の裏
 吉野 初瀬 志賀 奈良 生駒
 更級 姨捨 三笠 廣澤 須磨
 かように花月の名所の名を書くべし

新花月香記

香組花月作月一本
 嵐雲堂築舟

晴孔雀

月雲晴花	長一星三
月雲晴花	長一星三
月雲晴花	皆
月雲晴花	長二
月雲晴花	長二
月雲晴花	長一星三
月雲晴花	長一星三

○詩句香

流芳組

香五種也

窓 二包 清 二包 晚 二包
 涼 二包 風 二包

右試み五包終りて、出香五包打ちませ焚き出す。文字の通り聞きしだい、名乗紙に書き付けおき、五包終りて香元へ出だし、記録に写し、点をかくべし。「ウ」はなし。

○詩句香(しくこう) 流芳組

香五種也

「窓」二包 「清(きよし)」二包 「晚」二包
 「涼」二包 「風」二包
 右の内一包ずつ試みに出す。

右試み五包終りて、出香五包打ちませ焚き出す。文字の通り聞きしだい、名乗紙に書き付けおき、五包終りて香元へ出だし、記録に写し、点をかくべし。「ウ」はなし。

獨聞二点二人より一点餘の
 一息あり右の句いふより
 詩と成る五十句は愛どむ包の内
 一包試みし少くも多しなりても
 聞べし好みにしたがうべし此の例を以て
 いかようにも新句を作り出し用い
 給うべし五十句となし詩となればよし

詩句香之記

香經窓よみ清らめ
 晚夕涼花う
 風香

窓清涼風晚

名余窓風晚涼花

名余窓清涼風晚

名余晚涼意風清

月日

一点
 八点
 一点

「詩句香之記」

獨聞二点、二人より一点、餘は当たりの
 み一点なり。右の句いかように聞きても
 詩となる五十句に變ず。五包の内
 一包試みなしにして、「客」となしても
 聞くべし。好みにしたがうべし。此の例を以て
 いかようにも新句を作り出し用い
 給うべし。五十句となし、詩となればよし。

○花名所香
流芳組
香四種也

霧谷五包 芝山五包
嵐 二包

右の内一包ずつ試みに出す
句桜一包試みなし也

右試み三包終りて、出香十包打ちませ焚き出す。一炷ひらき。「句桜」、独聞三点、二人より二点、餘は当たり一点ずつ。左右へ

わかれ聞くべし。立物のすすむ事も点数に同じ。嵐の香きまがえぬれば、星一つ、立物も一間あどへ退くべし。立物のはこび、勝負の品、「源平香」に同じ。

札の表
霧谷四枚 芝山四枚 嵐一枚 句桜一枚
以上十枚一人分、百枚にて十人分なり。

札裏の紋

○花名所香(はなめいしよう) 流芳組

香四種也

「霧谷(きりがやつ)」五包 「芝山」五包 「嵐」二包
右の内一包ずつ試みに出す。
「句桜(おいざくら)」一包 試みなし。ウなり。

右試み三包終りて、出香十包打ちませ焚き出す。一炷ひらき。「句桜」、独聞三点、二人より二点、餘は当たり一点ずつ。左右へ

わかれ聞くべし。立物のすすむ事も点数に同じ。嵐の香きまがえぬれば、星一つ、立物も一間あどへ退くべし。立物のはこび、勝負の品、「源平香」に同じ。

札の表

「霧谷」四枚 「芝山」四枚 「嵐」一枚
「句桜」一枚
以上十枚一人分、百枚にて十人分なり。

吉野 初瀬 奈良 生駒 霞関
高砂 葛城 六田 嵐山 位山

立物の事

櫻 五本 都合 十本
八重 一重 二重 紅白 いろくの花
色かろうよ 小短冊
冊と付て 札の紋 名所の名をかき
盤の事

名所香の盤とわひりる

記録認めよう

凡名所香の通方
てかへし 記録の図は略し侍る

金鯉香

流芳組

香四種也
青鱗 紅鱗 斑鱗
右の内一包ずつ試みに出す
斑鱗(ばんりん) 一包 試みなし。客なり

「吉野」「初瀬」「奈良」「生駒」「霞関(かすみのせき)」

「高砂」「葛城」「六田(むつだ)」「嵐山」「位山(くらいやま)」

立物の事

「桜」左五本 右五本 都合十本なり。

八重、一重、二重、紅白いろいろの花を十

色かわりに作るべし。程、図のごとし。小短

冊を付けて札の紋、名所の名を書くべし。

盤の事

名所香の盤をかねもちゆ(兼用)べし。

記録認めよう

凡そ、「名所香」の通り、左の方、右の方と別

てかくべし。記録の図は略し侍る。

○金鯉香(きんせきこう) 流芳組

香四種也

「青鱗(せいりん)」四包 「紅鱗(こうりん)」四包

「白鱗(はくりん)」四包

右の内一包ずつ試みに出す。

「斑鱗(ばんりん)」一包 試みなし。客なり。

右試み三包終りて、出香十包打ちまぜて
 焚き出す。一炷ひらき。「ウ」一人間三点
 二人より二点餘は当たり一点ずつ。立物、
 のすすむも点に同じ。立物、初めは「青魚(くろぎうお)」、
 五間目にいたりて「紅魚(あかさうお)」にとりかゆ。九間目
 に至れば、また「白魚(しろうお)」に取りかゆ。早く向うにいたり
 着きしを「勝」と定むべし。

札の紋

表 青 三枚 紅 三枚 白 三枚 斑 一枚 以上
 十枚 一人分 百枚にて十人分なり。
 裏 金盃(きんかい) 錦被(きんひ) 鶴頂(かくちよう) 玉帯(ぎよくたい) 八瓣(はちべん) 砌玉(せいきよく) 堆金(たいきん) 蓮臺(れんたい) 紅塵(こうじん) 隔断(きやくだん) 右の名目、金魚斑色の名儀、「花鏡」に出でたり。因つてうつつす。

立物の事

札の紋

右試み三包終りて、出香十包打ちまぜて
 焚き出す。一炷ひらき。「ウ」一人間三点
 二人より二点餘は当たり一点ずつ。立物、
 のすすむも点に同じ。立物、初めは「青魚(くろぎうお)」、
 五間目にいたりて「紅魚(あかさうお)」にとりかゆ。九間目
 に至れば、また「白魚(しろうお)」に取りかゆ。早く向うにいたり
 着きしを「勝」と定むべし。

表「青」三枚 「紅」三枚 「白」三枚 「斑」一枚 以上
 十枚 一人分。百枚にて十人分なり。
 裏「金盃(きんかい)」「錦被(きんひ)」「鶴頂(かくちよう)」「
 「玉帯(ぎよくたい)」「八瓣(はちべん)」「砌玉(せいきよく)」「
 「堆金(たいきん)」「蓮臺(れんたい)」「紅塵(こうじん)」「
 「隔断(きやくだん)」
 右の名目、金魚斑色の名儀、「花鏡」に
 出でたり。因つてうつつす。

立物の事

別子香六種風音と名付試み
 右試之也 終て出香三包に風音此香
 五包加えて以上八包打交て焚き出す
 八炷とも聞き終りて連中名乗紙に
 して出す。包紙も開き、記録に
 うつし、当たりに点かくる。「鶯」「鶻」「鹿」の
 香を専ら聞くべし。もし、独聞あらば二点。
 餘は当たり一点ずつなり。

音信香之記

香煙音 ねれ柳

鶯 ちよん

鶻 ちよん

凡風廉凡風音凡能凡

名乘廉凡風音能凡能

名乘何風廉凡能凡音凡

名乘何廉凡何凡音凡

凡日

蒲積...
 十九

別に香五種「風音(かぜのおと)」と名付けて試みなし。
 (「ウ」にはあらず。)

右試み三包終りて、出香三包に「風音」の香
 五包加えて、以上八包打ちまぜて焚き出す。
 八炷とも聞き終りて、連中名乗紙に
 して出す。包紙も開き、記録に
 うつし、当たりに点かくる。「鶯」「鶻」「鹿」の
 香を専ら聞くべし。もし、独聞あらば二点。
 餘は当たり一点ずつなり。

「音信香之記」

○羽衣香 双戀組
 羽衣を奪いし物語、吾が国にては三
 保の浦、もろこしにては豫章(よじょう)の新
 諭縣(しんゆうけん)の事、和漢同日の談なり。此
 の事を組み侍る。
 香四種也 一、二、三、四包
 右試み三包過ぎて、出香十包打ちまぜて焚き
 出す。一炷ひらき。「客」独聞三点、二人
 より二点、餘は当たり一点ずつ。「天人方」釣
 人方と左右わかれ聞くべし。双方の
 連中の聞き何程(なほほど)とけし(消)合わせ、残りし数
 多き程、人形をすすむべし。たとえば「天人
 方」連中にて八点、「釣人方」連中に
 て六点ならば、「天人方」合し

○羽衣香(はごろもこう) 双戀組

羽衣を奪いし物語、吾が国にては三
 保の浦、もろこしにては豫章(よじょう)の新
 諭縣(しんゆうけん)の事、和漢同日の談なり。此
 の事を組み侍る。

香四種也

「一」四包 「二」四包 「三」四包

右の各々一包ずつ試みに出す。

「客」一包 試みなし。

右試み三包過ぎて、出香十包打ちまぜて焚き
 出す。一炷ひらき。「客」独聞三点、二人
 より二点、餘は当たり一点ずつ。「天人方」釣
 人方と左右わかれ聞くべし。双方の
 連中の聞き何程(なほほど)とけし(消)合わせ、残りし数
 多き程、人形をすすむべし。たとえば「天人
 方」連中にて八点、「釣人方」連中に
 て六点ならば、「天人方」合し

残二炷なれば二間すむべし。此の例にて一炷一炷にて進むべし。「持」は両方とも一間すむべし。早く中の「松」にすすみ着き、「羽衣」をとりし方、勝ちなり。「釣人方」はやく進みつき、「羽衣」を取るといへども、後、「天人方」のきき四炷多ければ、衣を取りかえず。また、「釣人方」、後に聞き六炷多ければ釣人の方へとりかえすべし。とかく初めにはやく取りし方、「勝」と定むべし。後の勝ちは「二の勝」にて、おとれりともすべし。

残二炷なれば二間すむべし。此の例にて一炷一炷にて進むべし。「持」は両方とも一間すむべし。早く中の「松」にすすみ着き、「羽衣」をとりし方、勝ちなり。「釣人方」はやく進みつき、「羽衣」を取るといへども、後、「天人方」のきき四炷多ければ、衣を取りかえず。また、「釣人方」、後に聞き六炷多ければ釣人の方へとりかえすべし。とかく初めにはやく取りし方、「勝」と定むべし。後の勝ちは「二の勝」にて、おとれりともすべし。

表裏「十炷香」の通りの札を用ゆべし。

札の紋

表裏「十炷香」の通りの札を用ゆべし。

立物の事

- 「天人の人形」一つ 「釣人の人形」一つ
- 「松」一本（柄あり。羽衣かけの枝あり。）
- 「羽衣」一つ（松にかけて盤の中になつ立る。）

盤

豎溝一筋、横た六間、右六間、間に
勝負の場あり。真中に穴一つ、「松」を
立て、「羽衣」をかけおくべし。
立物は、初めの図に委しくあり。見合わすべし。

羽衣香之記

香組一

二 いろり火

三 ちかまそく

四 ちかまのま

二二三二少一三二一三

天人方 止長負了

山櫻 二三 少一三 一三 八点

紅梅 一 二 一 二 一 三 六 点

白藤 二 二 少 二 三 六 点

約人方 古一点勝

青板 三 一 二 三 四 点

緑杏 三 一 三 二 少 一 三 二 一 三 十一 点

青蓮歌の巻 後編 二七

盤

豎溝一筋、横左六間、右六間。間に
「勝負の場」あり。真中に穴一つ、「松」を
立て、「羽衣」をかけおくべし。
立物は、初めの図に委しくあり。見合わすべし。

「羽衣香之記」

新行 三 三 一 六長
目

香道千代乃秋下二大尾

跋

先著し侍る秋乃光世にひろく
句いぬれば、猶も遺りしものを書き
集めて、志を同じくする人と共にせざるや
と、せち(拙)にすすめられて、つたなき
筆をとりぬ。此の餘、新組二十品組
を記しぬ。追々に李(栗) (りそう)にのぼさんと
欲す。或る人、余に問う「組香は香道の
終と或る人、余に問組香、香道の

香道千代乃秋下二大尾

跋

先に著し侍る『秋乃光』世にひろく
句いぬれば、猶も遺りしものを書き
集めて、志を同じくする人と共にせざるや
と、せち(拙)にすすめられて、つたなき
筆をとりぬ。此の餘、新組二十品組
を記しぬ。追々に李(栗) (りそう)にのぼさんと
欲す。或る人、余に問う「組香は香道の

要なるもの香道の要、別に有り。組香は女童に香を聞きならわしめ、初心を導かんとする筈蹄(せんてい)にして、組香は「香の歌舞妓」なるものなり。何ぞ要とせん。專要(せんよう)の事は先師より秘して伝うる事多し。よつて、みだりに梓に鐫(ちりば)め、門に入らざる人にあたえがたし。奥儀を学ぶべき、楷梯に此の書

乃初わ初一の事と奉る是よりして此の道と好む人浅きより深きに至れかしと書き集めぬ

享保十七壬子歲至日

大枝流芳書



の初めあらましの事を挙ぐる。是によりて此の道を好む人、浅きよりも深きに至れかしと書き集めぬ。

享保十七壬子歲至日

大枝流芳書

落款

元文元丙辰七月吉旦

京師書坊

堀川通高辻上ル町

植村藤右衛門

東都書坊

通石町三丁目

植村藤三郎

攝陽書坊

高麗橋壹丁目

植村藤三郎

正香道秘傳 附録奥乃枝折 志野古流秘書なり 未刻

秋農光

附録香志 古組香十品新組香十品

出来

千代の秋

新組三十品

出来

瀧乃絲

古組米川流之書 香包折形火道具図盤

出来

右大枝流芳子編集之書、玉枝軒

板行之分也

香道千代の秋大尾

改正 香道秘傳

附録奥乃枝折

志野古流秘書なり

未刻

秋農光

附録 香志 古組香十品 新組香十品有り

新組香十品有り

出来

千代の秋

新組三十品

その餘重寶の考多し

出来

瀧乃絲

古組 米川流之書

香包折形火道具図盤

出来

右、大枝流芳子編集之書、玉枝軒

板行之分也

香道千代の秋大尾

元文元丙辰七月吉旦

京師書坊 堀川通高辻上ル町

植村藤右衛門

東都書坊 通石町三丁目

植村藤三郎

攝陽書坊 高麗橋壹丁目

植村藤三郎

【凡例】

- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
- ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
- ③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。
- ④ 青字の（）は、筆者の補足です。
- ⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

令和二年三月

『香筵雅遊』 國井和裕